The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世艶書文芸の研究――女子教育との関わりを中心に――
Author(s)	岡部, 祐佳
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87778
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　岡　部　祐　佳　　）	
論文題名	近世艶書文芸の研究――女子教育との関わりを中心に――

論文内容の要旨

艶書文芸とは、艶書（恋文）やその贈答によって大半が構成される、あるいはそれが重要な構成要素となっている文芸のことを指す。本論文は、女子教育との関わりという視点から、近世の艶書文芸について論じたものである。

日本における近世は、商業出版の勃興・隆盛により、前時代より多くの人々が書物に触れる機会や教育の機会を得られるようになった時代である。当時の初等教科書である往来物の原型は往復書簡・書簡文例形式であり、この形は往来物の形が多様化した近世に至っても数多く刊行されている。加えて、庶民層の生活に密着した書簡文例や、商業に必要な文書・手形の雛形を収める文例集も刊行されるようになる。近世になると書簡がより人々の生活に身近なものとなり、多くの人々が書簡の読み書きを習得するようになったのである。こういった時代背景は、書簡体小説の流行や浮世草子における書簡や訴状・手形などの「はめ込み」といった表現方法など、文芸にも大きな影響を及ぼした。

艶書についても、その作法や文例を集めた書物が刊行されるなど、ほかの書簡と同じように人々の生活や文芸に浸透していったといえる。むしろ、当時の書簡体小説の多くが艶書を用いた恋物語であることに鑑みれば、文芸における書簡のなかでも、艶書はとりわけ重要な位置にあったと考えられる。

近世初期の艶書文芸については、従来その啓蒙性や教訓性が盛んに論じられてきた。特に『薄雪物語』は女子教育との関わりが濃厚な作品であり、当時の艶書文芸と女子教育との影響関係を示唆する作品として知られる。ところが、近世中期（18世紀）以降の艶書文芸について、艶書文芸研究という枠組みで論じたものはほとんどなく、艶書小説・書簡体小説の通史的研究においても、これらの作品は文芸性が低いと見なされ等閑視されてきた。そのため、近世中期以降の艶書文芸の内実や流れに関しては、未だ不明瞭な点が多く残されている。

また、往来物のなかには古状・擬古状と呼ばれるものがあり、古典作品や当代文芸と関わりの深い人物の書簡が題材として用いられていた。女性向けの往来物において、艶書が同様の用いられ方をしていたことを示す例（瀬川采女の妻・菊の艶書の往来物化）が存在するが、これに関してはこれまで深く検討されてこなかった。しかし、艶書文芸と女子教育との関わりを見るうえで重要な事象であり、一考の余地があるものと考えられる。

以上の問題意識の下、以下のとおり各論を展開し、第二部の最後には「瀬川采女説話関連資料一覧」を付した。

第一部では、享保～宝暦期に刊行された艶書小説に関する論考を集めた。ここでは、これまで近世初期の仮名草子を中心に指摘されてきた艶書文芸と女子教育との関わりが、後の時代にいかに顕われ変化していったかに着目した。

第一章では、享保期に刊行された艶書小説『新薄雪物語』『当流雲のかけはし』『薄紅葉』にみえる、散らし書きの時代背景およびその意味について検討した。享保頃になると庶民（上中層町人）の子女にまで手習いの習慣が浸透し、それに伴って女筆手本類が盛んに刊行されるようになった。享保期艶書小説の散らし書きは、この女筆ブームに便乗したものと考えられる。さらに、『当流雲のかけはし』の女性登場人物による散らし書きには、『女重宝記』などにみえる女筆への意識が顕著に反映されていることを指摘した。以上のことから、本書の散らし書きの版面が、女筆散らし書きの手本として読者に提示されていると結論付けた。

第二章では、『当流雲のかけはし』に掲載される和歌48首の出典とその利用態度を分析した。本書に掲出される和歌の出典は、二十一代集所収歌がもっとも多く、そのほかに類題集や『源氏物語』から採られたと思しきものがある。これは、当時の女子教育において、勅撰和歌集や『源氏物語』『伊勢物語』などが重んじられていたことと符合する。さらに、和歌の利用に際しては、典拠の詞書の内容まで作品に反映していること、和歌の技法を示すためやストーリーの展開に合わせるために、あえて語句を改変していること等を明らかにした。また、巻一全体の設定が『後撰集』収載歌に拠ることを指摘し、古歌の世界を当代風に「やつし」た作品であることを論証した。

第三章では、『当流雲のかけはし』の教訓性と娯楽性について考察した。本書の巻一と巻二以下とでは設定が大きく異なり、従来それは単なる分裂と捉えられてきた。しかし、巻一末尾で出家遁世を揶揄する描写がみられ、巻二以降は儒教的価値観による物語が展開していることから、この設定の違いは単なる分裂ではなく、仏教から儒教への価値観の変遷を示すものであると指摘した。艶書文芸への儒教的価値観の流入は『新薄雪物語』に萌芽的にみられたも

のであり、本書はそれをさらに押し進めたといえる。その背景には、『女大学宝箱』の刊行に端を発する「女大学」的女子教育観の浸透があったと考えられる。さらに、巻二・五のおそなと巻三・四の腰元という二人の女性に着目し、前者が教条主義的な女性像を、そして後者が恋愛小説としての娯楽性と相性のよい女性像を反映していると指摘した。

第四章では、宝暦期に刊行された艶書小説『新にしき木物語』について、典拠『新薄雪物語』と比較することでその特徴を分析した。『新にしき木物語』は、典拠の仏教的な結末を改変し、よりわかりやすい結婚による大団円としている。また、散らし書きが並べ書きに変更され、和歌の出典表記も削除されている。さらに、挿絵が本文の内容にそぐわない、婚礼や出産、宮参りの様子を描いたものに変更されている。この挿絵に描かれる行事は当時の女子教育で重んじられていたものであり、女子用往来と親和性の高いものである。以上のことから、本書が典拠より通俗的・大衆的な書物になっており、その挿絵には教育的な意図があったことを指摘した。さらに、この特徴が同じく宝暦期に刊行された、艶書小説『時勢花の枝折』と通ずる部分が大きいことも述べた。

付章では、享保期艶書小説における『源氏物語』の利用態度について考察した。『新薄雪物語』や『薄紅葉』における源氏利用は、基本的に強い教訓性を伴っていた。『当流雲のかけはし』も同様に教訓的な色彩を備えている。しかし、巻四の艶書比べの場面では、好色に通ずる内容を持つ『源氏物語』の和歌が利用され、「やさし」という言葉を用いて肯定的に評価されている。これは、新たに台頭してきた儒教的・「女大学」的な女性観と、『源氏物語』を好意的に捉える旧来的な女性観とが混在していた、当時の女子教育の様相を反映したものであると考えられる。

第二部では、小瀬甫庵『太閤記』巻十四にみえる「瀬川采女説話」に関する論考を集めた。本説話は、妻（菊）が夫（采女）へ宛てて書いた艶書を核としており、広義の意味で艶書文芸の範疇に入るものといえる。この説話は近世を通じて広く流布し、さまざまな文芸作品に取り入れられただけでなく、説話の中心を成す艶書が女子用往来として刊行されるなど、本論文の問題意識から見て注目すべき要素を多分に含んでいる。

第一章では、散文や演劇をはじめとする文芸作品や往来物、随筆や軍書などの関連作品を博捜し、菊の貞女性に着目しつつ近世における本説話の受容と展開を追った。菊は、武士的倫理観においては批判される傾向にあったものの、近世を通じて概ね「貞女」と捉えられていた。その菊の貞女性が夫への「誠」の愛情に起因するものであることを、『太閤記』や『艶道通鑑』、『采女玉章』跋文等の内容から指摘した。また、浮世草子などの散文作品においては、菊の美貌や教養、采女との仲睦まじさを強調する描写が加えられることで、その貞女性と恋愛譚としてのイメージが増幅される傾向にあった。一方、演劇においては、義理と人情の葛藤という構図を用いることで、菊の一途な愛情とそれに由来する貞女性が強調され、悲劇性が増幅される傾向がみられた。また、合巻や読本では、貞女性の負の側面として菊に「嫉妬」の性質が付け加えられる場合もあることを指摘した。

第二章では、近世における松浦佐用姫伝承と瀬川采女説話との結びつきについて論じた。菊と佐用姫とを重ね合わせる趣向が、種々の文芸作品において行われていたことを、実例を挙げつつ指摘した。また、浄瑠璃『大功艶書合』や合巻『兄弟丸蒔絵文箱』では、「菊」の字を名に持つ二人の女性が登場し、それぞれに①恋しい男に艶書を書く性質、②恋しい人と離別し佐用姫に譬えられる性質が分与されるという、発展的な趣向が見られるようになる。菊と佐用姫との強い結びつきは、肥前という場所や朝鮮出生に関わる夫婦の逸話であるという共通点のみならず、この二人が遠く離れた夫を一途に慕い「誠」の愛情を捧げる「貞女」と認識されていたことに起因するものと考えられる。

第三章では、菊の艶書が近世中後期に往来物として度々刊行されていることに着目し、その内容が原典である『太閤記』に記載されるものとは異なることを指摘した。往来物では和歌の表記が正されるといった啓蒙的配慮のほか、第二部第二章・第三章で述べたような菊イメージの反映が確認できる。菊は近世を通じて教養ある貞女と認識されていたが、往来物化にあたってもそのようなイメージを強調する方向性がとられ、菊とその艶書を「末永く女性の手本」とすべく、艶書内容の改変が行われたと考えられる。

貞女性を重んじる近世の女子教育と、好色に通ずる内容を持つ艶書文芸とは、一見すると対極に位置付けられるもののように見える。しかし実際には、和歌・『源氏物語』・『伊勢物語』をはじめとする古典や女筆散らし書き、あるいは一人の男に捧げる「誠」の愛情といった諸要素によって、両者は深く結びついていたといえよう。啓蒙性や教訓性は、近世初期の艶書文芸にも見られる特徴であったが、それが庶民女性への手習い浸透や「女大学」的女性観の広がりといった、時間の経過によって生じた新たな要素を取り込みつつ、次第に変化・強化されていったのである。

朱子学を中心とする儒教道徳が広く浸透していた近世において、恋愛を主題とするがゆえに好色と通ずる内容を持つ艶書文芸は、学智の鍛錬や修身・教訓のためといった弁解（建て前）なしには、堂々と刊行したり読んだりはしにくいという側面があった。教育によって常に貞節であることを求められていた女性たちは、特にこの葛藤のただ中にあった存在であるといえる。しかし、そのような弁解（建て前）が必要とされていたからこそ、それを逆手に取って、学智の鍛錬や教訓のために、娯楽的な恋愛小説である艶書文芸が利用されたという側面もあった。すなわち、近世における女子教育と艶書文芸とは、対極の関係にあるものではなく、むしろ相補的な関係にあったということができる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（岡部　祐佳）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	飯倉　洋一
	副 査	大阪大学　教授	滝川　幸司
	副 査	大阪大学　教授	岡島　昭浩

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　近世艶書文芸の研究　――女子教育との関わりを中心に――

学位申請者　岡　部　祐　佳

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　飯　倉　洋　一

副査　大阪大学教授　滝　川　幸　司

副査　大阪大学教授　岡　島　昭　浩

【論文内容の要旨】

本論文は、女子教育との関わりという視点から、近世の艶書文芸について論じたものである。序章では、近世における書簡文化の重要性を指摘し、書簡体小説が流行した時代背景から艶書文芸を研究する意義に及び、それを女子教育との関わりで論じる視点の有効性について述べる。つづく論考は、全体を二部構成とし、第一部「近世中期艶書小説に関する研究」には、享保から宝暦にかけて刊行された艶書小説に関する論考を集め、第二部「瀬川采女説話に関する研究」には、小瀬甫庵『太閤記』にみえる艶書説話に関する論考を集めている。

第一部第一章では、享保期艶書小説に見える散らし書きが、庶民女性への手習い浸透とそれに伴う女筆手本ブームの影響を受けたものであることを指摘する。とくに浮世草子『当流雲のかけはし』について、作品内容と照らし合わせつつ、作中の散らし書き書簡が「やさしき女筆」の手本として提示されていることを明らかにしている。第二章では『当流雲のかけはし』中の和歌の出典やその利用態度を分析することで、本書の古典教養書としての側面とやつしとしての側面を指摘している。第三章では、『当流雲のかけはし』の教訓性と娯楽性について論じている。本書の巻一と巻二以下に内容的な分裂があるとされてきたが、それは仏教から儒教へという価値観の変遷を示すものであることを指摘し、腰元の人物造型に着目することで、従来指摘されていない本書の娯楽性について検討している。第四章では、宝暦期に刊行された『新薄雪物語』の改作『新にしき木物語』の内容を分析するとともに、同時期に刊行された艶書小説『時勢花の枝折』と比較することで、宝暦期に艶書小説が辿った通俗化・庶民化という道筋を明らかにしている。さらに付章において、享保期艶書小説の『源氏物語』利用の態度について論じている。

第二部第一章では、文芸作品や往来物、随筆・軍書などの関連作品を博捜し、瀬川采女の妻菊の貞女性に着目して、近世における瀬川采女説話の受容と展開を追う。その結果、菊の貞女性が単なる教条主義的なものではなく、夫への「誠」の愛情として捉えられていたことを明らかにしている。第二章では、瀬川采女説話と松浦佐用姫伝承が、戦場に赴いた夫を一途に慕う「貞女」という共通項を以て深く結びついてゆく過程と、それに伴う文芸作品における菊イメージの展開を指摘している。第三章では、原典の『太閤記』と往来物化した菊の艶書の内容に違いがあることを指摘し、往来物系統の本文では、文芸作品などで構築された菊イメージを踏襲しつつ、菊とその艶書を

女性の手本として示すための工夫がなされていることを指摘している。

終章では、以上の考察を踏まえて、和歌や古典、女筆散らし書き、「誠」という倫理などによって、艶書文芸と女子教育が深く結びついていることが明らかになったとし、従来の艶書文芸と女子教育とを対蹠的に見る見方を相対化し、両者を相補的な関係として捉えうるとし、近世の艶書小説、ひいては書簡体小説の再構築を展望している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の独創的な点は、浮世草子研究や説話系譜論というアプローチではなく、書簡体小説研究という展望の中で、艶書小説を対象とし、女子教育との関わりの中でとらえることによって、思想史・教育史などとの領域横断的な研究への可能性を開いたということである。そもそも書簡体小説の通史的構想を有する研究自体 1930 年代の市古貞次「艶書小説の考察」や、1943 年の暉峻康隆『日本の書翰體小説』以来、ほぼ皆無である。しかし、往来物の研究の進展などによって、書簡文化の見直しが各研究分野で進んでいる現在、本論文の構想は、評価に値するだろう。その大きな構想の中での第一歩にすぎないが、今後の展開が大いに期待されるところである。

第一章では、従来評価が高いとはいえず、先行研究も乏しい浮世草子『当流雲のかけはし』に焦点をあて、作品中の散らし書きに注目することによって、女子教育との関連を浮かび上がらせ、その文学史的意義を明らかにした点は重要な研究成果である。掲載歌の出典とその利用態度の丹念な検討によって、本書が上中層町人の女性たちに求められる和歌的教養を反映していることを明らかにし、従来、分裂とも言われていた巻ごとの落差を、教訓性と娯楽性の二面を合わせもつテキストであると捉え返すなど、本書の再評価に成功していると言えよう。

第二章では、資料として付された「瀬川采女説話関連資料一覧」に見られるように、「瀬川采女説話」を網羅的に収集したこと自体が高く評価できるが、その素材を丁寧に検討し、松浦佐用姫伝承との交渉や往来物化の様相を実証的に明らかにした功績は大きい。

ただ、「艶書」の定義・範囲があまり明確でない点、第一部と第二部の方法が違い、論文のトータリティという点からいうと断絶が感じられる点、やや申請者の価値判断が不用意に出てしまっている箇所がある点などは、問題があったと指摘せざるを得ない。

とはいえ、「艶書文芸」を女子教育と関わらせて書簡体小説史の端緒として構想し、従来の研究に新たな知見を多く加え得たことは高く評価することができる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。